

## 談話における右方移動構文とその指導\*

加 藤 雅 啓\*

(平成18年9月27日受付；平成18年10月5日受理)

### 要 旨

英語の構文には、基本語順では文頭、文中、あるいは名詞句内に生じる要素が、元来の位置から文の右方へ移動している構文がある。本稿では、このうち長くて「重い」目的語名詞句が右方へ転移されて生じる重名詞句転移構文を取り上げ、(i)この構文には「統語的複雑性」と「情報の重要度」がともに関与していること、(ii)移動される要素だけでなく、「飛び越される要素」の「重さ」、及び「情報の重要度」をも考慮しなければならないこと、及び(iii)基本語順から逸脱した文の解釈と指導上の問題点等について、英語の談話における具体例を挙げて例証する。

### KEY WORDS

discourse	談話	Heavy NP Shift	重名詞句転移
information status	談話の重要度	postposing construction	後置文
rightward movement	右方移動	syntactic complexity	統語的複雑性

### 0. はじめに

英語の最も一般的な語順はS + V + Xであり、Xは目的語、補語、あるいは副詞相当語句がこれに相当する (Write and Hope 1996: 116)。したがって、英語の他動詞構文では、目的語は動詞の直後に置かれ、補語や副詞句などに先行する構造、すなわちS + V + O (+M)が基本語順となる。しかし、目的語が長く、統語的にも複雑な構造をしている場合、この目的語を右方に(文末に)移動し、英語の基本語順から逸脱する構文がある。

- (1) a. She visited him that very day.  
b. She visited her best friend that very day.  
c. She visited that very day *an elderly and much beloved friend*.  
(Quirk *et al.* 1985:1362)
- (2) a. John sent money to his mother.  
b. \*John sent to his mother money.  
c. John sent to his mother *the money you had wanted him to give to us*.  
(McCawley 1988: 511)
- (3) a. Chris gave a bowl of Mom's traditional cranberry sauce to Terry.

---

\* 言語系教育講座

- b. Chris gave Terry *a bowl of Mom's traditional cranberry sauce*.

(Arnold *et al.* 2002: 28)

基本語順では、(1a), (1b) のように目的語は動詞の直後に置かれ、副詞句 *that very day* は文末に置かれる。しかし、目的語が長くなった場合には、(1c) のように文末に置かれる方が好まれる。この現象は、(2c) の *the money you had wanted him to give to us* のような「重い」目的語名詞句を後置することはできるが、(2b) の *money* のような「軽い」目的語を後置すると不適格な文となる。(3b) は、(3a) の目的語 *a bowl of Mom's traditional cranberry sauce* を文末に後置してできた二重目的語構文である。このように、基本語順では文頭、文中、あるいは名詞句内に生じる要素が、右方向へ移動を受けて派生した（と従来考えられてきた）構文は、一般に右方移動構文と呼ばれる。このうち、とくに (1c), (2c) のような「重い」目的語を文末（またはそれに近い位置）に後置された構文を「重名詞句転移構文」という。(2b) が不適格文であるように、右方移動構文は常に適格であるわけではない。

- (4) John purchased for his wife *a brand new fur coat*.

- (5) a. What did John purchase for his wife?

- b. For whom did John purchase a brand new fur coat?

(Rochemont and Culicover 1990: 24)

- (6) a. John bought for his mother *a painting that he liked*.

- b. \*John bought for Kim *a watch*.

(Rochemont and Culicover 1990: 116)

- (7) Jenkins walked back into the office and glanced out of the window. Turning around, he saw on the desk *a gun*.

(Huddleston and Pullum 2002: 1383)

例文(4), (6a), (6b), (6)は重名詞句転移構文の例である。(4)は疑問文 (5a) に対する応答としては適格であるが、(5b) に対する応答文としては不適切である。また、関係節を含む比較的長い（重い）名詞句が後置されている (6a) は適格であるが、*a watch* のような比較的「軽い」名詞句が後置されている (6b) は不適格となっている。その一方で、(7)のように、統語的に「軽い」名詞句でも適切な文脈が与えられれば適格となることがある。

右方移動構文については、どのような場合に適格となり、どのような条件の下に不適格になるのか、その適格性条件を巡って様々な考え方が提唱されてきた。とりわけ、重名詞句転移構文については、何らかの意味で「重い」名詞句が関与していると考えられているが、(4)–(7)の例を見ても明らかなように、この「重い」という概念を統語的に規定するには無理があると思われる（田子内・足立 2005: 35）。

本稿では、右方移動構文のうち、とくに重名詞句転移構文の適格性条件について、(i)情報構造の観点（高見 1995 a, b）, (ii) 統語解析の観点（Hawkins 1994）, (iii)「文法的複雑性 (grammatical complexity)」と「情報価値 (discourse status)」の観点（Arnold *et al.* 2002）を概観し、(i)–(ii)の問題点を指摘した後、(iii)の妥当性について検証する。重名詞句の後置については、「飛び越される要素」の「重さ」だけでなく、その「情報の重要度」をも考慮しなければならないことを論じる。また、重名詞句であるにもかかわらず後置されない例について、その理由を考察する。さらに、学習者及び指導者の視点に立ち、重名詞句転移構文、及び二重目的語構文の解釈と産出に関する留意点について具体的に検討していくことにする。

## 1. 高見 (1995a, 1995b) の分析

### 1.1 機能的制約

英語の情報構造は、一般に、旧情報から新情報の順に配列されることが知られている。すなわち情報量の高い焦点要素はできるだけ文末に配置されるというのが原則である。したがって、基本語順を用いると焦点要素が文頭や文中に生じるような場合、これを避けるために重名詞句転移構文などの右方移動構文を用いて、焦点要素を文末に移し、重要度の高い情報であることを際立たせることがある。次の (8B), (9B) は重名詞句転移構文が用いられた例である。

(8) A : What did John buy for Mary?

B : He bought for her *a beautiful emerald necklace*.

(9) A : Who did John buy a beautiful emerald necklace?

B : \*He bought for Mary the *beautiful emerald necklace*. (高見 1995b: 151)

(8A) への返事として *a beautiful emerald necklace* が後置されている (8B) は適格である。しかし、(9A) の疑問の焦点 *who* に対して、その答えとは異なる要素 *the beautiful emerald necklace* が後置されている (9B) は不適格となっている。後置されている要素に着目すると、(8B) では最も重要度の高い情報を伝えているのに対し、(9B) では情報量が低いにもかかわらず後置されている。このような考察から高見 (1995b) は次の制約を提案している。

(10) 英語の後置文に課される機能的制約：英語の後置文は、後置要素が文の焦点 (= 最も重要度の高い情報) として解釈される場合にのみ適格となる。 (高見 1995b: 154)

制約(10)は、Quirk *et al.* (1985) の「文末焦点 (end-focus)」の原則を「情報の重要度」という観点から定式化したものと考えられ、次のような名詞句からの外置の適格性をとらえることができる。

(11) a . John drove a car in Boston *with a sunroof*.

b . \*John drove a car carefully *with a sunroof*. (高見 1995b: 154)

(11a) では、場所の前置詞句 *in Boston* は、時の副詞句と同様に、文頭に生じることができ、主題として機能するため、旧情報を担っている。このため、後置要素の *with a sunroof* は、この文の焦点として解釈され、「ジョンがボストンで運転した車はどんな車か」というサンルーフ付きの車であった」という情報を伝えているので、制約(10)によって適格となる。一方、(11b) では、様態の副詞 *carefully* は手段を示す副詞句と同様に、文頭に生じることができないため、焦点として解釈される。このため、後置された *with a sunroof* は焦点として解釈されないため、制約(10)に違反し、不適格とされる。

### 1.2 機能的制約(10)の問題点

全く同じ統語構造を持つ後置要素でありながら、その適格性に相違がある(11)のような例を正しくとらえることができるという点で、制約(10)は一定の一般化を達成しているといえよう。しかしながら、全く問題がないわけではない。

第一の問題点は、制約(10)は「情報の重要度」という観点だけで右方移動の適格性を判断している点である。重名詞句転移構文を精査してみると、情報の重要度よりむしろ後置される名詞句の文法的複雑性、いわゆる「重さ」が密接に関与している例が存在する。

- (12) a. They pronounced guilty *every one of the accused*.  
 b. He had called an idiot *the man on whose judgment he now had to rely*.

(Quirk *et al.* 1985: 1395)

(12)は、いずれの例も基本語順 SVOC から目的語を後置して SVCO の語順にした重名詞句転移構文である。(12a) で後置されている *every one of the accused* と *guilty* の情報の重要度を比較してみよう。この文は判決を言い渡す場面で用いられたと考えられ、この場面で最も重要度の高い情報は当然その判決内容である *guilty* であるしたがって、(12a) は、高見 (1995b) の主張する制約(10)に違反していることになり、不適格とされるはずであるが、実際には全く問題のない適格文である。

(12b) は、ある特定の人物をどのように判断していたかということが問題となっている場面で用いられたと思われる。したがって、この文脈で最も重要度の高い情報は *an idiot* であり、後置されている要素 *the man on whose judgment he now had to rely* ではないことは明らかである。(12a) と同様、制約(9)はこの文を誤って不適格としてしまう。<sup>1</sup>

上記の考察から、(12a)、(12b) のような重名詞句転移構文では、右方移動の鍵を握っているのは、情報の重要度ではなく、後置される要素の文法的な複雑性であるということが出来る。<sup>2</sup>

高見 (1995b) の制約(10)に関する第二の問題点は「曖昧性の回避 (ambiguity avoidance)」という視点を欠いている点である。Arnold *et al.* (2000: 33) では、ある文が VP + NP + PP の構造を持ち、NP が定代名詞、もしくは固有名詞でない場合、PP が VP に付くのか、NP に付くのか曖昧性が生じるが、NP を PP の右方に移動した VP+PP+NP の語順では、そのような曖昧性は生じない、と指摘されている。

- (13) a. If you want to identify in the inner city *the fifth graders who could really take off*...  
 b. When Kennedy announced last July *his plans to quit*... (Arnold *et al.* 2000: 33)

もし、前置詞句の *in the inner city* が、目的語 *the fifth graders who could really take off* の後ろに位置する基本語順を用いると、この前置詞句はこの目的語の一部として解釈されてしまう。重名詞句が後置された (13a) では、そのような曖昧性は生じない。同様に、(13b) では、重名詞句転移構文を用いることによって、副詞句 *last July* が *announced* を修飾するのか、あるいは *quit* を修飾するのか、という曖昧性を回避することができる。類例をもう少し見てみよう。

- (14) a. She herself interviewed *with hurtful disdain* the student I had turned down.  
 b. She herself interviewed the student I had turned down *with hurtful disdain*.

(Quirk *et al.* 1985: 499)

関係節を伴う重名詞句を後置した (14a) では、*with hurtful disdain* はインタビューをした際の態度を表していると解釈され、曖昧性が回避されているが、(14b) では、*with hurtful disdain* が関係節内の動詞句を修飾していると解釈されてしまう。

Arnold *et al.* (2000) は、語順と曖昧性の回避について次のように述べている。

Constituent ordering may also help the speaker to avoid potential attachment ambiguities, a strategy that would benefit the listener... Since ambiguous syntactic structures put an extra burden on the parser, minimizing such ambiguities makes the hearer's task easier. (Arnold *et al.* 2000: 33)

すなわち、構成素の配列（語順）を変えることにより、話者はある要素がどの要素に付加するのかという曖昧性を回避することができ、これは聞き手にとって有益な方略となる、と指摘している。

(13)–(14)の例から、統語的な曖昧性を回避するために重名詞句を後置する場合がある、ということは明らかである。すなわち、高見（1995 a, b）が主張するような「情報の重要度」という観点だけで、談話における重名詞句転移構文の機能の総てをとらえることは困難であるといえるだろう。

## 2. Hawkins (1994) の分析

### 2.1 早期直接構成素の原則

Hawkins (1994) は、全ての語順は「統語的な重さ (syntactic weight)」によって決定される、と次のように強い主張を展開している。

“I believe that the major determinant of word-order variation, and indeed of all word order, is syntactic weight, while informational notions play only a subsidiary role.” … there are, in fact, correlations between information status and syntactic weight. Syntactically shorter noun phrases (such as pronouns and proper names) are generally more definite than longer ones, because less information is needed to identify referents that are “mutually known” (cf. Clark and Marshall 1981) or “mutually manifest” (cf. Sperber and Wilson 1986), compared with those that are being introduced to the hearer and described for the first time…certain observed tendencies in the data of performance can be derivative and secondary consequences of other more fundamental determinants. (Hawkins 1994: 111-113)

情報価値と重さのあいだには相関関係があり、聞き手にとって初めて提示される指示対象と比べると、話し手、聞き手相互に既知の指示対象を同定するにはより少ない情報ですむことから、統語的に短い名詞句は長い名詞句より定性が高いと Hawkins は論じている。さらに、情報構造は補助的な役割しか果たしておらず、情報構造に依存した原則は「統語的な重さ」のようにより基本的な原則から導かれた二次的な結果である、と強い主張を展開している。

言語運用のレベルでは、左から右へと順次入力されてくる語の連鎖を解析し、句構造標識とその直接構成素ができるだけ早く、かつ、効率よく認識されるように配列されていることが望ましい、と Hawkins (1994) は想定し、次のような「早期直接構成素の原則 (Principle of Early Immediate Constituent)」を提案している (Hawkins 1994: 77)。

#### (15) 早期直接構成素の原則

The human parser prefers linear orders that maximize the IC-to-non-IC ratios of constituent recognition domains.

この原則は、人間の統語解析にとって、構成素認識領域の直接構成素対非直接構成素の比率を最大にする語順が好ましいということを規定したものである。この原則(14)がどのように機能するか、重名詞句転移構文の例で見よう。

- (16) a. I<sub>VP</sub> [gave<sub>NP</sub> [the valuable book that was extremely difficult to find]<sub>PP</sub> [to Mary]]
- 1        2        3        4        5        6        7        8        9 10        11

- b. I<sub>VP</sub> [gave<sub>PP</sub> [to Mary]<sub>NP</sub> [the valuable book that was extremely difficult to find]]  
           1          2      3          4

(16a), (16b) は、いずれも *gave, the, to* という母節点構築範疇を見ることによって、動詞句の直接構成素は動詞、名詞句、前置詞句の3つであると認識される。(16a) の場合、これら3つの構成素を全て認識するには、*gave* から *to* まで、合計11個の単語（非直接構成素）を順に見ていかねばならない。したがって、(16a) の場合、動詞句の直接構成素対単語の比率は、3対11、すなわち27.3%ということになる。一方、(16b) では、これら3つの構成素を判別するには、*gave, to, Mary, the* の4つの単語を見るだけでよい。これによって、直接構成素対単語の比率は3対4、すなわち75%となる。(Hawkins は説明を簡略化するため非直接構成素の代わりに単語を数えて示している)

重名詞句が動詞の直後に置かれた基本語順 (16a) と重名詞句が文末に転移された重名詞句転移構文 (16b) の直接構成素対単語の比率を比較すると、27.3%対75%となっている。早期直接構成素の原則 (15) から、重名詞句が文末に後置されたため、直接構成素対単語の比率が高くなった (16b) のほうが、基本語順である (16a) より解析の効率がよいことになり、(16b) が望ましい語順であることが数量化されて明確に示されている。

## 2.2 「早期直接構成素の原則」の問題点

早期直接構成素の原則(15)は、語順の問題は総て「統語的な重さ」の問題に還元できるという仮定に基づいている。したがって、原則 (15) は「統語的な重さ」が同じであるにもかかわらず、適格性に相違があるような事例を正しくとらえることができないのではないと思われる。

(17) A : What did John buy for Mary?

B : He bought for her *a beautiful emerald necklace*.

(18) A : Who did John buy a beautiful emerald necklace?

B : \*He bought for Mary *the beautiful emerald necklace*. (高見 1995b: 151)

(19) a. John drove a car in Boston *with a sunroof*.

b. \*John drove a car carefully *with a sunroof*. (高見 1995b: 154)

(17), (18), (19)は、すでに1.1で見たように、高見 (1995b) が自らの制約(10)の妥当性を主張するために挙げた例である。(17B) と (18B) は、同じ統語構造を持ち、後置されている要素の「統語的な重さ」も、飛び越されている要素の「統語的な重さ」も全く同じである。動詞に続く2つの直接構成素（前置詞句と名詞句）を認識するのに必要な単語数はいずれも3である。これから導かれる直接構成素対単語の比率は、いずれも  $2/3 = 66.7\%$  である。したがって、早期直接構成素の原則(15)によれば、(17B) と (18B) の適格性は同じであると予測するが、実際には両者の適格性は異なっている。(19a) では、目的語に続く2つの直接構成素を認識するのに必要な単語は *in, Boston, with* の3語であるから、直接構成素対単語の比率は  $2/3 = 66.7\%$  である。一方、(19b) では、2つの直接構成素認識に必要な単語は *carefully, with* の2語であるから、直接構成素対単語の比率は  $2/2 = 100\%$  である。したがって、早期直接構成素の原則(15)は、比率の高い (19b) のほうが (19a) より適格性が高いと予測するが、これは事実とは反対の予測である。

二重目的語構文の間接目的語は、たとえ「統語的に重い」場合でも後置されないことが知られている (Huddleston and Pullum 2002)。

- (20) a. They gave anyone who scored over 90% a special prize.  
b. \*They gave a special prize anyone who scored over 90% .

(Huddleston and Pullum 2002: 1384)

(20a) と (20b) の直接構成素対単語の比率は、それぞれ  $2/6 = 33.3\%$ ,  $2/4 = 50\%$  である。早期直接構成素の原則(14)は、比率の高い (20b) のほうが (20a) より適格性が高いと誤った予測をしてしまう。

早期直接構成素の原則(15)は、「統語的に重い」要素を文末に置いたほうが文の解析が容易になり、望ましい語順となることを数量化して明確に規定した、という点で一定の評価をすることができる。しかしながら、これまで見てきたように、Hawkins (1994) の分析には文の適格性判断に対して、誤った予測が入り込む余地がある、という経験的な問題が残されていることが明らかになった。

### 3. Arnold *et al.* (2000) の分析

#### 3.1 「文法的複雑性 (重さ)」対「談話上の位置付け (新しさ)」

Arnold *et al.* (2000) は、コーパスの分析と実験の結果から、動詞に後続する要素の語順を決定するのは「文法的複雑性 (grammatical complexity)」と「談話上の位置付け (discourse status)」である、すなわち、いわゆる要素の統語的な「重さ (heaviness)」と情報の「新しさ (newness)」が語順の決め手となる、と主張している。語順に影響する要因について、統語的な「重さ」、あるいは情報の「新しさ」をそれぞれ単独に扱った研究はこれまで多数あるが、両者を同時に論じた研究は例を見ないこと、さらに右方移動構文は聞き手の解釈を容易にするばかりでなく、話し手の発話を容易にする、と Arnold *et al.* (2000) は論じている。

Arnold *et al.* (2000) は、Wasow (1997), Hawkins (1994) に従い、「重さ」を比較対象となる構成素の語数によって決定すると定義している。この定義は、(i)2つの構成素の相対的な「重さ」を比較・表示でき、(ii)相対的な語数を比較することにより、「重さ」の効果が段階的であるととらえることができる、などの利点があるとしている。情報の「新しさ」については、Prince (1992) にしたがって、(i)談話的既知情報 (discourse-given), (ii)推論可能 (inferable), (iii)談話的新情報 (discourse-new) の3分類とし、それぞれ、「指示対象が先行文脈で言及されている情報」、「指示対象が先行文脈で明示的には言及されていないが、他の要素から推論可能な情報」、「談話にとって全く新しい指示対象である情報」と定義されている。本稿では、情報構造の定義の妥当性について詳しく検討するわけではないので、便宜上、(i)と(ii)をまとめて旧情報、(iii)を新情報として議論を進めることにする。<sup>3</sup>

#### 3.2 「文末重心」の機能

Arnold *et al.* (2000) は、「文末重心」の原則は、(i)聞き手の解釈を容易にするばかりでなく、(ii)話者の発話を容易にするように機能している、と論じている。

(i)については、Bever (1970) の「難しい要素を文末に (“Save the hardest for last”）」、及びすでに2節で議論した Hawkins (1994) の「直接構成素確定までの語数が少ないほど理解が容易になる」という「早期直接構成素の原則」を挙げ、「文末重心」の機能は聞き手の解釈を容易にするように働く、と指摘している。

(ii)については、Clark and Wasow (1998), Wasow (1997a, b) を援用し、話者は言い回しや言葉遣いなどをよく考える前に発話を始めるため、短く、やさしい要素で文を始め、長くて複雑な構成素のような生成しにくい要素を文末に置く（生成を遅らせる）ことにより、話者がこれらの要素を発話するのに必要な時間を稼ぐことができる、と論じている。

(21) a. That brings to the plate *Barry Bonds*.<sup>4</sup>

b. That brings Barry Bonds to the plate. (Arnold *et al.* 2000: 32)

(21a) は、野球の実況中継などで頻繁に聞かれる重名詞句転移構文の例である。基本語順の(21b)に比べると、(21a)は聞き手にとって決して理解しやすいわけではない。これは、Hawkins (1994) の早期直接構成素の原則(15)に従うと、直接構成素対単語の比率が(21a)は50%なのに対し、(21b)は66.7%であることから確認できる。しかし、(21a)のような重名詞句転移構文を用いることにより、アナウンサーはスコアボードを見て、次の打者が誰であるか確認するだけの時間を稼ぐことができることになる。この意味で、重名詞句転移構文を用いて文末重心にすることは、話者の発話を容易にすることに貢献している、と Arnold *et al.* (2000) は主張している。<sup>5</sup>

### 3.3 「旧情報から新情報へ (given-before-new)」の機能

Arnold *et al.* (2000) は、「旧情報から新情報へ (given-before-new)」の機能についても、(i)聞き手の解釈を容易にするばかりでなく、(ii)話者の発話を容易にするように機能している、と論じている。

(i)については、旧情報で文を始めることにより、先行文脈と結びつきを保ち、さらに、これから話すこと（新情報）との間につながりをもたらしことによって、談話の連続性が確保され、聞き手の理解を容易にできるとしている。また、(ii)については、Levelt (1989), Bock (1986, 1987) 等の研究成果から、文の特定の位置（文末）が新情報である、ということから、話者は聞き手に何が新情報であるか、ということを伝えやすいこと、また、新しく、難しい名詞句を後置することは話者にとって、何を話し、その内容を伝える言語表現を選択・構成し、はっきりと発音して述べるのに必要な時間を稼ぐことができる、ということから話し手の発話にも有利に働く、と Arnold *et al.* (2000) は指摘している。

Arnold *et al.* (2000: 33) では、右方移動構文が曖昧性の回避に貢献し、聞き手思考の方略であることを指摘しているが、これについてはすでに1.2節で論じたのでここでは省略する。本節では、重くて、新しい要素を後置することは、聞き手の解釈を容易にすることに加え、話し手の発話計画 (planning) と文の生成を容易にすることができる、という Arnold *et al.* (2000) の議論を概観してきた。次節では、二重目的語構文、及び重名詞句転移構文について、Arnold *et al.* (2000) が行ったコーパスの分析を見ていくことにする。なお、彼らが行った二重目的語構文に関する実験とその結果については、紙数の都合上割愛し、稿を改めて論じることとする。

### 3.4 コーパスの分析

#### 3.4.1 コーパスの分析方法

Arnold *et al.* (2000) が使用したのは the Aligned-Hansord corpus と呼ばれるコーパスで、カナダ議会における議論を筆写したデータが収められている。このコーパスは、(i)スピーチな



どの口語と準備された原稿による書記言語の2種類のデータが含まれていること、(ii)議題ごとに分類され、それぞれが独立した談話となっているため、用いられている名詞句を旧情報・新情報に分類する作業が容易になる、という2つの利点を備えている。分析の対象となるのは、次例のような *give* を用いた二重目的語構文 (269 例) と *bring...to...* (223 例), *take...into account...* (167 例) の2つの重名詞句転移構文である。

- (22) a. The bank was told it should give its business to a friend of the Government.  
 b. It is enough to *bring tears to* the eyes of the Statue of Justice that stands silently in front of the Supreme Court of Canada.  
 c. It *takes into account* the need not to be overtaken by the constant evolution of the labour market.<sup>6</sup> (Arnold *et al.* 2000: 35)

Arnold *et al.* (2000) は明確な定義をしていないが、与格構文 V+NP1+PP における NP1 を theme NP, PP に含まれる NP2 を goal NP と呼んで区別している。

### 3.4.2 分析結果

Arnold *et al.* (2000) は、二重目的語構文が現れている頻度を(i) theme NP が新情報, goal NP が旧情報, (ii) theme NP と goal NP が同じ情報価値, (iii) theme NP が旧情報, goal NP が新情報, の3つの場合に分け、それぞれの場合について、(a) theme NP が goal NP より重い, (b) theme NP と goal NP が同じ重さ, (c) theme NP が goal NP より軽い場合について分析した。Arnold *et al.* (2000: 37-38) では、分析の結果は折れ線グラフで表示されているが、これを筆者が読み取って、まとめたものが以下の表である。<sup>7</sup>

表1 (i) theme NP が新情報, goal NP が旧情報の場合

theme NP と goal NP の重さ比較	二重目的語構文の出現率
(a) theme NP > goal NP	100%
(b) theme NP = goal NP	60%
(c) theme NP < goal NP	0%

表2 (ii) theme NP と goal NP が同じ情報価値の場合

theme NP と goal NP の重さ比較	二重目的語構文の出現率
(a) theme NP > goal NP	83%
(b) theme NP = goal NP	40%
(c) theme NP < goal NP	5%

表3 (iii) theme NP が旧情報, goal NP が新情報の場合

theme NP と goal NP の重さ比較	二重目的語構文の出現率
(a) theme NP > goal NP	100%
(b) theme NP = goal NP	15%
(c) theme NP < goal NP	0%

表1(a), 表2(a), 表3(a)の二重目的語構文の出現率を見ると, 極めて高い確率を示している。このことは, theme NP は, その情報価値の如何を問わず, goal NP より「重い」場合は, 文末に後置され, 二重目的語構文となって現れる傾向が高いことを示している。

Arnold *et al.* (2000) は, 重名詞句転移構文が現れている頻度を, (i)目的語が新情報, (ii)目的語が旧情報, の2つの場合に分け, それぞれの場合について, (a)目的語が前置詞句より4語以上長い, (b)目的語が前置詞句より1～3語長い, (c)目的語が前置詞句と同じ長さ, (d)前置詞句が目的語より1～3語長い, (e)前置詞句が目的語より4語以上長い場合について分析を行った。Arnold *et al.* (2000: 37-38) では, 分析の結果は折れ線グラフで表示されているが, これを筆者が読み取って, まとめたものが以下の表である。

表4 (i)目的語が新情報の場合

目的語と前置詞句の重さの比較	重名詞句転移構文の出現率
(a) 目的語が前置詞句より4語以上長い	99%
(b) 目的語が前置詞句より1～3語長い	85%
(c) 目的語が前置詞句と同じ長さ	50%
(d) 前置詞句が目的語より1～3語長い	2%
(e) 前置詞句が目的語より4語以上長い	3%

表5 (ii)目的語が旧情報の場合

目的語と前置詞句の重さの比較	重名詞句転移構文の出現率
(a) 目的語が前置詞句より4語以上長い	75%
(b) 目的語が前置詞句より1～3語長い	3%
(c) 目的語が前置詞句と同じ長さ	2%
(d) 前置詞句が目的語より1～3語長い	1%
(e) 前置詞句が目的語より4語以上長い	0%

表4に注目すると, 目的語が新情報である場合には, 長さが前置詞句と同じかそれ以上である場合は, 50%以上の確率で重名詞句転移構文が出現する。しかし, 目的語が新情報であっても, 前置詞句より極端に短い場合には重名詞句転移は起こりにくいといえる。表5では, 目的語が旧情報である場合, 重名詞句転移構文の出現率は極めて低く, 目的語が前置詞句より4語

以上長い場合以外には重名詞句転移はほとんど生じることはいえる。これらの分析から、重名詞句転移構文の生起条件として、情報価値と統語的「重さ」の両方が関与していることが伺える。

### 3.4.3 考察

Arnold *et al.* (2000) がコーパスの分析から明らかにしたことは、(i)統語的な「重さ」と情報の「新しさ」はともに語順と相関関係にあること、(ii)統語的な「重さ」、あるいは情報の「新しさ」のいずれか一方だけが語順と相関関係にあるということはいえない、ということである。これは、二重目的語構文、及び重名詞句転移構文の両方に当てはまることであり、相対的に統語的に重く、かつより新しい情報を担う要素は文末に後置される傾向にあるといえる。

二重目的語構文は、theme NP が goal NP より相対的により新しく、重い場合に高い頻度で生起し、重名詞句転移構文は、目的語が前置詞句より「新しさ」らしく、重い場合に出現が増加する、という傾向が統計的に有意に認められた。分析データを詳細に検討すると、さらに次の3点が明らかになったと論じている (Arnold *et al.* 2000: 38-39)。(i)統語的な「重さ」のほうが、情報の「新しさ」よりも多様な例を説明することができる。(ii)情報の「新しさ」がその効果を発揮するのは、統語的な「重さ」が際立った予測を行わない、いわば中間的領域においてである。すなわち、情報の「新しさ」の効力は、一方の構成素が他方の構成素より際立って長い場合は弱い、2つの構成素の長さが近似している場合ではその効果が現れてくる。(iii) *take into account* の例のほうが、*bring to* の例より重名詞句転移構文が生じやすい。

Arnold *et al.* (2000: 50) では、上記(i)、(ii)について、統語的な「重さ」と情報の「新しさ」という2つの要因のうち、一方の要因がそれほど決定的ではない場合、他方の要因が話者の語順選択に大きな影響を及ぼす、と指摘されている。すなわち、構成素間に大きな統語的な「重さ」の違いがある場合には、軽い要素を前に、重い要素を後ろに回す語順が選ばれ、談話における情報価値は大きな役割を果たさないが、ある要素が際立って「接近可能 (accessible)」である場合には、統語的な「重さ」よりも情報の「新しさ」のほうが語順選択に大きな影響を与えるということになる。

## 4. 語順を決める主要因：「統語的な重さ」vs.「情報の重要度」

Arnold *et al.* (2000) では、動詞に後続する要素の語順を決定する主要な要因は、統語的な「重さ」と情報の「新しさ」である、と主張されている。本節では、Arnold *et al.* (2000) の主張の妥当性について、英字新聞、*National Geographic* 等から収集した重名詞句転移構文、及び二重目的語構文の例を取り上げて検証することにする。情報の「新しさ」については、高見 (1995a: 136, 1995b: 154) で指摘されているように、「新情報／旧情報」というような2項対立的な概念を用いるより、「より重要度が高い情報／より重要度が低い情報」というような相対的概念を用いることとする。<sup>8</sup>

### 4.1 「飛び越される要素」の位置付け

従来、右方移動構文における統語的「重さ」、あるいは情報の重要度について議論する際、後置される要素のみに目を向けがちであった。これに対し、Huddleston and Pullum (2002) は、

“The felicity of a postposing depends not simply on the weight of the postposed constituent, but on the relative weight of it and the constituent over which it is moved (Huddleston and Pullum 2002: 1383).” と述べ、「飛び越される要素」の相対的な重さも考慮すべきであると指摘している。

- (23) a. You’ ll find the company’s latest financial statement on your desk.  
 b. You’ ll find on your desk *the company’ s latest financial statement*.
- (24) a. You’ ll find the company’s latest financial statement in the top drawer of *the tall black filing cabinet alongside the window*.  
 b. ?You’ ll find in the top drawer of the tall black filing cabinet alongside the window *the company’s latest financial statement*.
- (25) a. ?You’ ll find the report that the company has prepared in response to the secretary’ s latest allegations on your desk.  
 b. You’ ll find on your desk *the report that the company has prepared in response to the secretary’ s latest allegations*. (Huddleston and Pullum 2002: 1383)

(23b) では、目的語 NP は場所を表す前置詞句よりはるかに重いので、後置が可能である、しかし、義務的ではない。(24b) では、「飛び越される要素」である場所を表す前置詞句が相対的に重いので、目的語 NP を後置すると容認性が極めて低くなる。(25a) では、目的語 NP が場所を表す前置詞句よりはるかに重いので、後置が義務的となっている。

しかし、次例のように Huddleston and Pullum (2002) が指摘する「飛び越される要素」の相対的な統語的「重さ」を考慮するだけでは不十分であり、相対的な情報の重要度をも考慮しなければ説明できない事例が存在する。

- (26) Serena ousted early

MELBOURNE (AP) Outplayed from the start, defending champion Serena Williams was beaten 6-1, 7-6 (7-5) Friday in the third round of the Australian Open *by Slovakia’s Daniela Hantuchova*.

Williams had struggled with her form in her first two matches, overcoming a flood of errors to get by two low-ranked opponents. (*The Daily Yomiuri*, Jan. 22, 2006)

(26)では、*by Slovakia’s Daniela Hantuchova* が過去分詞 *beaten* に後続する要素 6 – 1, 7 – 6 (7 – 5) Friday in the third round of the Australian Open を飛び越えて文末に後置されている。後置された要素と飛び越された要素の統語的「重さ」を比較すると、前者が4語であり、後者は12語であることから、後者のほうがはるかに重いことが分かる。Huddleston and Pullum (2002: 1383) が指摘するように、後置される要素の相対的な統語的「重さ」が飛び越される要素のそれより軽い場合には、要素の後置は不可能であるとする、(26) は不適格文となるはずであるが、実際には適格文である。

ここで (26) の後置された要素と飛び越された要素の情報の重要度を検討してみると、全豪テニストーナメントで前年度優勝者であるセレナ・ウィリアムズが負けた相手が誰であるか、ということは文中で最も重要度が高い情報であるといえる。右方移動構文を論じる際、飛び越される要素の統語的「重さ」を考慮に入れることを指摘した Huddleston and Pullum (2002) の方向性は誤っていないが、これに加えて、飛び越される要素の相対的な「情報の重要度」をも考慮に入れる必要があることは (26) の例から明らかである。

したがって、本稿では、後置された要素と飛び越される要素双方の相対的な統語的「重さ」と情報の「重要度」を考慮に入れて議論していくことにする。

#### 4.2 収集した例文の分析

収集した例文を分類する際、理論的には、(i)統語的「重さ」と情報の「重要度」がともに高い、(ii)統語的「重さ」は高いが情報の「重要度」は低い、(iii)統語的「重さ」は低い、情報の「重要度」は高い、(iv)統語的「重さ」と情報の「重要度」がともに低いカテゴリーの4つに分類することが可能である。しかし、実際には、(iii)及び(iv)の事例は見つからなかったため、以下では、(i)と(ii)、及びこれに類似する例を検討していくことにする。

(i) 統語的「重さ」と情報の「重要度」がともに高い例

- (27) ...Later, outside the Slave House, an island youth asked me in halting English, "Where you from?" I pondered. Was I Jamaican, American African, or all of these? "I am a Senegalese," I told him jokingly. "No, you no look African," he chided.

I recognized in that exchange *our mutual curiosity, our need as children of Africa to reestablish connections.* (National Geographic, Sep. 1992: 72)

- (28) Porsche to take 20% stake in VW

BERLIN (AP) ---...The two companies worked together to develop Porsche's Cayenne sport utility vehicle and Volkswagen's Touareg. They recently announced that they, along with Audi AG, were forming an alliance to develop hybrid engines.

"With this engagement, we want to secure our business relations with VW and also safeguard in the long term *a significant part of our future planning,*" Porsche Chief Executive Officer Wendelin Wiedeking said in a statement.

(The Daily Yomiuri, Sep. 27, 05)

- (29) Survey: Nix general study classes

...According to results of a survey on compulsory education conducted by the Education, Science and Technology Ministry, released Saturday, many teachers said too much time and effort were required to provide such classes.

About 80 percent of middle school teachers also said in the survey *that more importance should be given to Japanese language and mathematics study.*

(The Daily Yomiuri, June 20, 2005)

- (30) O' Malley family to sell history-filled Dodgers

Los Angeles (AP) ---Peter O'Malley, whose family has controlled the Dodgers since 1950---seven years before they moved from Brooklyn to Los Angeles---surprised the baseball world Monday by announcing that the team is for sale. (6段落省略)

The O' Malleys leave to baseball *a rich and powerful legacy,* acting commissioner. Bud Selig said. "I want to assure Dodger fans, Peter and the team that will work with them to keep the franchise in Los Angeles."

(The Daily Yomiuri, Jan. 8, 1997)

(27) - (30) は、いずれも重名詞句転移構文の例である。(27)では、飛び越された要素 *in that exchange* は、前方照応的な指示代名詞 *that* が用いられていることから分かるように情報の重要度も低く、統語的「重さ」も高くない。一方、後置された要素 *our mutual*

*curiosity, our need as children of Africa to reestablish connections* は、12 語と統語的「重さ」も高く、文脈における情報の重要度も高い。(28) では、後置された要素 *a significant part of our future planning* と飛び越された要素 *in the long term* の相対的な統語的「重さ」を比較してみると、前者の語数は7語であり、後者は5語である。また、文脈から前者のほうが後者より相対的な情報の重要度が高いことは明らかである。(29) では、後置された要素 *that more importance should be given to Japanese language and mathematics study* は語数も12語であり、調査の結果明らかになった事柄であることから、飛び越された要素 *in the survey* より統語的「重さ」、情報の重要度ともに上であることは明らかである。(30) では、米国メジャーリーグのドジャースを巡る話題が展開されていることから、後置された要素 *a rich and powerful legacy* は飛び越された要素 *to baseball* より統語的「重さ」も情報の重要度も上である。

(31) A Lawmaker Works, Oddly Enough, to Keep His Voters' Backyards Dangerous By ADAM COHEN, Dallas

…In his much-cited book “VHF” s the Matter With Kansas?,” Thomas Frank laments that conservatives have succeeded in getting red-state voters to vote against their own interests on important issues. The Republican Congressional leadership’ s opposition to a serious chemical plant security bill could test the limits of this phenomenon. If Mr. Barton - or Senator James Inhofe, the Oklahoma Republican who is leading the fight in the Senate - sides with industry against his own constituents on averting a Sept. 11 in their own backyard, he could hand his opponents *an issue that resonates powerfully with ordinary voters*.  
(The New York Times May 26, 2005)

(31)は二重目的語構文の例である。後置された要素 *an issue that resonates powerfully with ordinary voters* は、飛び越された要素 *his opponents* より統語的「重さ」も情報の重要度も上であることが見て取れる。(27) - (31) は、後置される要素の統語的「重さ」と情報の「重要度」がともに高い典型的な重名詞句転移構文、及び二重目的語構文であり、Arnold *et al.* (2000) の主張を裏付ける例文であるといえる。

(ii) 統語的「重さ」は高いが情報の「重要度」は低い例

(32) Becker: Pills, drink fought stress

BERLIN (Reuters) --Three time Wimbledon champion Boris Becker says he took pills and alcohol to cope with the stress of the tennis world.

The former world No. 1 reveals in an autobiography to be published later this month *that he was addicted to sleeping pills for years and also had a drinking problem*.

(The Daily Yomiuri, Nov. 6, 2003)

(32) は重名詞句転移構文の例である。(32) の各要素の統語的「重さ」を見てみると、飛び越された要素 *in an autobiography to be published later this month* は9語であるのに対し、後置された要素 *that he was addicted to sleeping pills for years and also had a drinking problem* は15語で、後置された要素のほうが重いことが分かる。一方、情報の重要度を見てみると、飛び越された要素が伝える内容は、記事のこの箇所ですべて明かされた情報であり、その重要度は高いといえる。しかし、後置された要素は、その内容がすでに見出しや先行文脈で言及されていることから、情報の重要度は低い。したがって、(32) では、情報の重要度より統語的「重さ」が優先されて重名詞句転移がなされた、と考えられる。

(iii) 統語的「重さ」は近似しているが情報の「重要度」は低い例

(33) Kirilenko storms past Morita

By Ken Marants: Daily Yomiuri Sportswriter

Japan saw the future of women' s tennis here and, like the overcast skies above Ariake, it's neither bright nor overly gloomy.

Highly touted teenager Ayumi Morita put up a tough fight but went down in straight sets to Russian Maria Kirilenko in their first-round match Tuesday at the AIG Japan Open at Tokyo' s Ariake Tennis Park. (The Daily Yomiuri, Oct. 5, 2005)

(33) は *to Russian Maria Kirilenko* が *in straight sets* を飛び越えて後置されている重名詞句転移構文である。後置された要素と飛び越された要素の統語的「重さ」は4語と3語であり、両者に大きな相違はないといえる。一方、飛び越された要素 *in straight sets* は初出であり、「ストレート負けを喫した」という意味で情報の重要度は高い。後置された要素の *Kirilenko* は、すでに見出しに現れているため、後置された要素は情報の重要度という点では高いとはいえない。このように考えると、*to Russian Maria Kirilenko* を後置する根拠は統語的「重さ」でもなく、また情報の重要度でもないため、Arnold *et al.* (2000) の主張と矛盾することになる。

また、Huddleston and Pullum (2002: 1383) は、“And in the present context we need to note that discourse-new status may be sufficient to motivate postposing when the NP concerned is not heavy” と述べ、後置される要素が重くない場合、新情報は後置を引き起こす十分条件としてはたらく、と指摘している。しかし、後置された要素 *to Russian Maria Kirilenko* は新情報である要件を満たしていないので、(33) は Huddleston and Pullum (2002) の主張に対しても矛盾した振る舞いを見せている。

(33) の右方移動には、Bolinger (1979) が主張する定名詞句表現による「再同定化 (reidentification)」という機能が関与していると思われる。すなわち、後置された要素 *to Russian Maria Kirilenko* は、再同定化のために焦点化され、*in straight sets* を越えて右方に移動されたのではないかと考えられる。紙数の都合上、この問題については稿を改めて論じることにする。

これまで(i)統語的「重さ」と情報の「重要度」がともに高い例、(ii)統語的「重さ」は高いが情報の「重要度」は低い例、(iii)統語的「重さ」は近似しているが情報の「重要度」は低い例を分析してきたが、(32) のように情報の「重要度」より統語的「重さ」が優先された例は存在するが、その逆の例は入手できなかったこと（注2参照）から考えると、談話における重名詞句転移構文、あるいは二重目的語構文などでは、統語的「重さ」と情報の「重要度」という2つの要因が同時に等しく働くのではなく、統語的「重さ」が優先して働くと考えられる。

## 5. 右方移動構文の指導

### 5.1 右方移動構文の解釈と産出

英語の他動詞構文では、目的語は動詞の直後に置かれ、補語や副詞句などに先行する構造、すなわち S + V + O (+M) が基本語順となる。しかし、目的語が長く、統語的にも複雑な構造をしている場合、この目的語を右方に（文末に）移動し、英語の基本語順から逸脱する語順を取ることがある。英語の学習では、右方移動構文のように基本語順から逸脱した文について

2つの問題が生じる。一つは解釈の問題、他の一つは文の産出の問題である。最初に右方移動構文の解釈について考えてみよう。

(34) a. They pronounced guilty *every one of the accused*.

b. He had called an idiot *the man on whose judgment he now had to rely*.

(Quirk *et al.* 1985: 1395)

(34a) は目的語 *every one of the accused* が「重い」ため、基本語順の S + V + O + C から S + V + C + O の語順に変化した重名詞句転移構文の例である。目的語 *every one of the accused* が文末に移動していることに気づかないと正しい解釈は得られない。(34a) の場合は、*guilty* が形容詞であることが文解析のヒントになるが、(34b) の場合は、*an idiot* が名詞句なので、目的語 *the man on whose judgment he now had to rely* が文末に移動したことが理解できないと、*an idiot* を目的語、*the man on whose judgment he now had to rely* を補語として分析し、結果として誤った解釈をしてしまうおそれがある。そこで、基本語順から逸脱した文を解釈する際、次のような原則を与えることが有益である。ここで目的語が「重い」とは、長く、複雑な構造をしているということである。

(35) 動詞の目的語が「重い」場合、後続する前置詞句や副詞句を飛び越えて文末に後置されることがある。

次に、右方移動構文の産出について考えてみることにする。いわゆる「重い」目的語を文末に後置することにより、文の構造がより明瞭になることで、統語解析の効率化が図られ、それだけ読み手・聞き手の理解が容易になる、という効果が得られる。これを話し手・書き手の立場に立って考えてみよう。基本語順に従うと、動詞の直後に「重い」目的語が置かれ、その後に副詞句や前置詞句、あるいは関係節などの他の要素を伴う場合、文の構造が複雑になることで統語解析の効率が下がり、結果として読み手・聞き手の理解が困難になる、ということが想定される。場合によっては、基本語順を用いると文の意味が曖昧になることがある。

(36) a. If you want to identify in the inner city *the fifth graders who could really take off*...

b. When Kennedy announced last July *his plans to quit*... (Arnold *et al.* 2000: 33)

すでに1.2節で見たように、もし基本語順を用いると、前置詞句 *in the inner city* が目的語 *the fifth graders who could really take off* の後ろに置かれ、この前置詞句は目的語の一部として解釈される可能性が生じる。「重い」目的語が後置された(36a)では、そのような曖昧性は生じることはない。同様に、基本語順を用いると、文末の副詞句 *last July* が *announced* を修飾するのか、あるいは *quit* を修飾するのかという曖昧性が生じるが、重名詞句転移構文を用いた(36b)では、*his plans to quit* を文末に後置することによって、このような曖昧性を回避することができる。類例をもう少し見てみよう。

(37) a. She herself interviewed *with hurtful disdain* the student I had turned down.

b. She herself interviewed the student I had turned down *with hurtful disdain*.

(Quirk *et al.* 1985: 499)

関係節を伴う重名詞句を後置した(37a)では、*with hurtful disdain* はインタビューをした際の態度を表していると解釈され、曖昧性が回避されているが、基本語順(37b)では、*with hurtful disdain* が関係節内の動詞句を修飾しているという誤った解釈がなされてしまう。これらのことから、文の産出に関して次のような原則を示すことが有益であると思われる。

(38) a. 動詞の目的語が「重い」場合、後続する前置詞句や副詞句を飛び越えて文末に後置す



ることができる。

- b. 基本語順を用いると曖昧性が生じる場合、「重い」目的語を後続する前置詞句や副詞句を飛び越えて文末に後置する。

## 5.2 文中における if 節と不変化詞の位置

統語的「重さ」が語順に影響を与えるのは、これまで見てきた重名詞句転移構文や二重目的語構文ばかりではなく、文中における if 節の位置や句動詞における不変化詞の位置を上げることができる。Yule (1998, 2004<sup>2</sup>: 136) によると、if 節が文中に占める位置について、80%が文頭の位置に、20%が文末の位置に生じると報告されている。if 節が主節より長く、「重い」場合は文末に後置され、単に条件を述べるというより、さらに踏み込んだ情報を盛り込むという機能を果たしていると指摘されている。

- (39) We have no other option *if the government continues to prevent relief supplies from being transported to the large numbers of people seeking humanitarian aid.*

(Yule 1998, 2004<sup>2</sup>:137)

文末の if 節は、条件を述べるというより、むしろ政策を転換すべきであるという要請を行っているとして解釈される。さらに、文末に置かれた if 節は、主に「後からの思いつき」や「すでに知られている事柄を思い出すための合図」として機能すると指摘されている。

- (40) a. There's no other choice, *if you still want to go there.*  
b. I don't know why she goes out with him *if he's such a jerk.*

(Yule 1998, 2004<sup>2</sup>: 137)

文中の要素の「重さ」が語順に影響を与えるとして、句動詞における不変化詞の位置を上げることができる。

- (41) a. Sue picked up *the dog.*  
b. Sue picked *the dog up.*
- (42) a. Sue picked up *a couple of boxes containing old computer manuals.*  
b. ?Sue picked *a couple of boxes containing old computer manuals up.*

(Huddleston and Pullum 2002: 1371)

- (43) a. Em, did he leave the part about end-weight in information structure out?  
b. He was careful not to leave out the part about end-weight in information structure.

(Yule 1998, 2004<sup>2</sup>:176)

目的語が「軽い」場合には、(41a), (41b) のように目的語の前後に不変化詞 up を置くことができるが、(42a) のように目的語が「重い」場合は、目的語は文末に移動しないと (42b) のように適格性が低くなる。同様に、「重い」目的語を文末に後置した (43b) のほうが好ましい語順であるとされている (Yule 1998, 2004<sup>2</sup>: 176)。

## 5.3 与格構文と二重目的語構文

### 5.3.1 英語史からの考察

本節では、次の例文の適格性の相違を動詞の起源・由来に関する英語史の知見に基づいて検討していくことにする。

- (44) a. They'll give some old books to *the library.*

- b. They' ll give *the library* some old books.
- (45) a. They' ll donate some old books to *the library*.  
 b. \*They' ll donate *the library* some old books. (Yule 1998, 2004<sup>2</sup>:190)

一般に, (44a) は与格構文, (44b) は二重目的語構文, あるいは与格移動構文と呼ばれている構文である。日本人英語学習者にとって, 二重目的語構文を取ることができる動詞とそうでない動詞を正しく使い分けることは, それほど容易ではない。以下, Yule (1998, 2004<sup>2</sup>) に基づき, 与格構文と二重目的語構文の両方を取ることができる動詞 (Group 1), 与格構文のみを取る動詞 (Group 2), 二重目的語構文のみ取る動詞 (Group 3) の3グループについて, 英語史の観点から分析していくことにする。

古英語 (OE) では, 二重目的語構文が一般的であった。古英語に起源を持つ近代英語 (Mod. E, 1475 年以降) の動詞は依然として二重目的語構文を取っていた。中英語 (ME, 1100 ~ 1500 年頃) 後期には, ラテン語起源の新しい動詞が仏語からの借用語として入ってきた。仏語の動詞は与格構文しか持たないため, 新しく入ってきた動詞は二重目的語構文を取ることとはできず, もっぱら与格構文で用いられた。古い動詞は二重目的語構文の他に, 新しい与格構文でも用いられるようになった。これらの知見に後述する強勢に関する項目を加えてまとめたものが表6である。

表6

Group 1		Group 2		Group 3
古英語起源		ラテン語起源		
第一音節に強勢		第二音節に強勢		
与格構文, 二重目的語構文いずれも可		与格構文のみ可		二重目的語構文のみ可
(+ to)	(+ for)	(+ to)	(+ for)	
bring	build	communicate	construct	bet
give	buy	describe	create	cast
send	cook	donate	design	fine
teach	get	explain	obtain	forgive
tell	make	report	purchase	spare

Group 1 と Group 2 を区別する二つ目の要因は強勢の位置である。一般に, 古英語起源の動詞は単音節語であるが, ラテン語起源の動詞は, 二音節以上の音節から構成され, その第二音節に強勢が置かれる。注目すべきは, ラテン語起源の動詞の構造と音節の数, 及び強勢の位置である。古英語起源の単音節の動詞に比べ, ラテン語起源の動詞は複数の音節から構成されているため, 比較的長いことがわかる。また, *OF-fer*, *PROM-ise* のような例外もあるが, ラテン語起源の動詞は第二音節に強勢が置かれる傾向がある。このことから, 英語の構文を学習する際, 次のような原則を与えることは, 学習者の理解を促進すると思われる。

- (46) 第一音節に強勢を持つ短い動詞は与格構文, 及び二重目的語構文のいずれにも用いることができるが, 第二音節に強勢を持つ長い動詞は与格構文のみで用いられる。

原則 (46) に従えば, どの動詞が二重目的語構文, 及び与格構文で用いられ, どの動詞が与格構文のみで用いられるか, おおよその見当はつくはずである。本節で提示した原則 (35), (38a,b), (46) は, 右方移動構文の解釈, 産出, 構文の学習に極めて有益だと思われる。

## 6. ま と め

本稿では, 右方移動構文のうち, とくに重名詞句転移構文の適格性条件について, (i)情報構造の観点 (高見 1995a, b), (ii) 統語解析の観点 (Hawkins 1994), (iii)「文法的複雑性」と「情報価値」の観点 (Arnold *et al.* 2002) を概観し, (i)–(ii)の問題点を指摘した (1 節, 2 節)。さらに, (iii)の妥当性について, 筆者が英字新聞, 雑誌等から収集した例文をもとに検証し, Arnold *et al.* (2000) の主張は, 原則的には極めて妥当なものであることを論じた (3 節, 4 節)。この間, 重名詞句の後置については「飛び越される要素」の統語的「重さ」だけでなく, その「情報の重要度」をも考慮しなければならないことを明らかにした (4.1 節)。また, 右方移動構文の指導については, 統語的な「重さ」がその解釈と産出に大きく関わっていることを明らかにし, 指導上の原則を提案した (5.1 節)。さらに, if 節と不変化詞の位置について統語的な「重さ」が関与していることを指摘し (5.2 節), 与格構文と二重目的語構文で用いられる動詞の起源に基づく英語構文学習の原則を提示した (5.3 節)。

\* 本研究は, 日本学術振興会平成 17 年～18 年度科学研究費補助基盤研究(C) 課題番号 No.17520322 の援助を受けてなされた研究の一部である。本稿は, 加藤 (印刷中) に, 紙数制限のため割愛した英語学習者に対する右方移動構文の指導について, 大幅な加筆を行ったものであるが, 論文全体の整合性を保つため重複する部分を含んでいることをあらかじめ断っておく。

## 注

1. Quirk *et al.* (1985: 1395) では, SVOC や SVOA の構文は, その目的語が長く複雑である場合は, 文末焦点, あるいは文末重心のため後置することができると述べられている。
2. Huddleston and Pullum (2002: 1383) では, 後置される名詞句が「重く」ない場合, 談話における「新情報」という情報価値が後置を引き起こすための十分条件となる, と指摘されている。
  - (i) Jenkins walked back into the office and glanced out of the window. Turning around, he saw on the desk *a gun*.  
 a gun は「重い」要素ではないが, on the desk と比較すると談話においてより新しい情報であるため後置が可能となっている。しかし, この種の後置は「重さ」に動機づけられた後置に比べて頻度は低く, その機能を基本語順と比較すると, 後置された目的語 a gun は予想外のものである, ということを強調している, と指摘されている。
3. Arnold *et al.* (2000) は, コーパスの分析の際, 推論可能な名詞句 (inferable NP) のデータが少ないため, 後に情報を given/inferable と new の 2 分類に改めている。
4. 斜字体は筆者によるものである。

5. Arnold *et al.* (2000) は, Wasow (1997 a, b) を引用し, 話者の要請と聞き手の要請が衝突する場合, 話者は自らの要請を優先させる, としている。
6. 斜字体は筆者によるものである。以下, 例文(27)–(33)の斜字体, 及び下線も筆者によるものである。
7. Arnold *et al.* (2000) では, SPSS 6. 1 等の統計処理ソフトを用いて正規の統計処理を行ったうえで議論を進めているが, 本稿では, Arnold *et al.* (2000) の議論を概観するために必要な部分に限って紹介することにとどめる。各表に記入した数値は, Arnold *et al.* (2000) が提示している折れ線グラフから筆者が読み取ったものであることをあらかじめことわっておく。
8. 高見 (1995a: 136) では, 「重要度の高い情報」は次のように定義されている。  
重要度の高い情報：話し手がある文を発話する際, 聞き手がその文中のある要素の出現を予測できない (unpredictable) と話し手が見なすとき, その要素はその文の焦点であり, 重要度が高い情報である。言い換えれば, 話し手が聞き手にとくに伝達したい部分, つまり断定 (assert) している部分を焦点, または重要度が高い情報と呼ぶ。

### 参考文献

- Arnold, J.E., T. Wasow, A. Losongco and R. Ginstrom (2000) "Heaviness vs. Newness: The Effects of Structural Complexity and Discourse Status on Constituent Ordering," *Language* 76, 28-55.
- Bever, T. (1970) "The Cognitive Basis for Linguistic Structure," In Hayes, J.R (ed.) *Cognition and the Development of Language*, 279-362. Wiley and Sons, New York.
- Bock, J.K (1986) "Meaning, Sound, and Syntax: Lexical Priming in Sentence Production," *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition* 124, 575-586.
- Bock, J.K (1987) "An Effect of the Accessibility of Word Forms on Sentence Structures," *Journal of Memory and Language* 26, 119-137.
- Bolinger, D. (1979) "Pronouns in Discourse," In Givon, T. (ed.) *Discourse and Syntax. Syntax and Semantics*. vol.XII., 289-310. Academic Press, New York.
- Clark, H.H. and T. Wasow (1998) "Repeating Words in Spontaneous Speech," *Cognitive Psychology* 27, 201-242.
- Collins, P. C. (1991) *Clefts and Pseudo-Clefts Constructions in English*. Routledge, London.
- Declerck, R. (1984) "The pragmatics of It-clefts and Wh-clefts," *Lingua* 64, 251-289.
- Declerck, R. (1988) *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-Clefts*. Leuven University Press, Leuven.
- Hawkins, J. A. (1994) *A Performance Theory of Order and Constituency*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Horn, L. R. (1981) "Exhaustiveness and the Semantics of Clefts," *NELS* 14, 108-131.
- Huddleston, R. and P. K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Kato, M. (1997) "WH-clefts in Discourse: a Relevance-Theoretic Approach," *International Journal of Pragmatics* 7, 1-17.

- Kato, M. (1998a) "A Relevance-Theoretic Approach to WH-clefts in Discourse," *Papers from the Fifteenth National Conference of the English Linguistic Society of Japan*, 91-100.
- 加藤雅啓 (1998b) 「分裂文と Wh 分裂文の排他的含意」 *International Journal of Pragmatics* 8, 33-48.
- 加藤雅啓 (2002) 「分裂文と擬似分裂文の総記的含意」『英語青年』148: 7, 236-237.
- 加藤雅啓 (2003) 「談話における分裂文と擬似分裂文の総記的含意」『言語学の眺望2003』福岡言語学会, pp. 199-210, 九州大学出版, 福岡
- 加藤雅啓 (印刷中) 「談話における右方移動構文－統語的複雑性と情報価値－」 *International Journal of Pragmatics* 16
- Kayne, R. (1994) *The Antisymmetry of Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Larson, R. (1988) "On the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 9, 335-391.
- Levelt, W.J.M. (1989) *Speaking*, MIT Press, Cambridge, MA.
- McCawley, J. (1988, 1998<sup>2</sup>) *The Syntactic Phenomena of English*, 2 vols., University of Chicago Press, Chicago.
- Prince, E. (1978) "A Comparison of Wh-clefts and It-clefts in Discourse," *Language*, 54, 883-906.
- Prince, E. (1992) "The ZPG Letter: Subjects, Definiteness, and Information Status," In Thompson, S. and Man, W. (eds.) *Discourse Description: Diverse Analyses of a Fundraising Text*, 295-325. John Benjamins, Amsterdam.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Rochmont, M.S and P.W Culicover (1990) *English Focus Constructions and the Theory of Grammar*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Sperber, D. and D. Wilson (1986, 1995<sup>2</sup>) *Relevance: Communication and Cognition*, Blackwell Publishers, Oxford
- 高見健一 (1995a) 『機能的構文論による日英語比較—受身文, 後置文の分析』くろしお出版, 東京
- 高見健一 (1995b) 『日英語の右方移動構文—その構造と機能—』ひつじ書房, 東京
- 田子内健介・足立公也 (2005) 『右方移動と焦点化』研究社, 東京
- Wasow, T. (1997a) "Remarks on Grammatical Weight," *Language Variation and Change* 9, 81-105.
- Wasow, T. (1997b) "End-weight from the Speaker's Perspective," *Journal of Psycholinguistic Research* 26, 347-361.
- Wright L. and J. Hope (1996) *Stylistics: A Practical Coursebook*, Routledge, London.
- Yule, G.. (1998, 2004<sup>2</sup>) *Explaining English Grammar*. Oxford University Press. Oxford.

# An Analysis of the Postposing Constructions in Discourse and its Application to Second Language Learning

Masahiro KATO \*

## ABSTRACT

This article is concerned with the functions of postposing constructions in discourse. The main points argued are: (i) that variations in postverbal word ordering have been attributed to both grammatical complexity (heaviness) and informational status(newness) in discourse, although few researches address the two factors clearly; (ii) that the felicity of a postposing depends not only on the heaviness and informational status of the postposed constituent, but on the relative weights and informational status of the constituent over which it is moved. Based on these considerations on grammatical complexity and informational status, we propose a few of new teaching ideas regarding heavy NP shifts, double object constructions, and conditionals.

---

\* Division of Languages: Department of Foreign Languages